

Title	ルーマニア語の起源について
Author(s)	伊藤, 太吾
Citation	大阪外国語大学学報. 35 p.15-p.30
Issue Date	1976-03-01
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80568">https://hdl.handle.net/11094/80568</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ルーマニア語の起源について

伊 藤 太 吾

## The Origine of Romanian

Taigo ITO

There is a very controversial problem about the origine of Romanian Languages i.e. Daco-Romanian, Aromanian, Megleno-Romanian and Istro-Romanian. There are two different groups of scholars with their own opinions: one party thinks that Daco-Romanian has been spoken in the territory of present Romania without interruption from Roman era, and the other's opinion is that Romanian was created in the cis-Danubian region and that the present Romanian is the result of a immigration from that part of the Balkan Peninsula.

We have concluded that the place of Proto-Romanian is situated in the southern area of the Danube and that the period of the formation of the Proto-Romanian dates back to IX<sup>th</sup> and X<sup>th</sup> centuries.

I スペイン語の場合は、その母体はカスティリア語であり、そしてその発祥の地は旧カスティリアであるという風に、年代は別にすれば、かなり正確に揺籃の範囲を我々は知っているが、ルーマニア語の生成地に関しては、すでに100年間の論争があるという事自体が知られていないし、又その解決も いまだに成されていないというのが現状である。問題の所在は、ルーマニア語は「継続」か「移住」かという点にある。前者の主張するところは、ルーマニア語は今日のルーマニア・ほぼ昔のダーキアにトラヤヌス帝が植民を始めた時以来ずっと今日まで中断することなくロマンス語が行われているという事であり、後者の意見は、271年の帝国によるダーキア放棄の時に引き続きいわゆる蛮族の侵入によりダニューブ河以北の地にはロマンス語を話す者が居なくなり、今日のルーマニアでロマンス語が話されているのはダニューブ河以南にスラヴ族と混住していたローマ人の後胤が後世河北に移住した結果であり、その為に現代ルーマニア語にはスラヴ語的要素が多いというのである。前者は主としてルーマニア人の歴史学者及び言語史家の提唱する説であり、後者はルーマニア人以外の言語学者が主になって唱えていて、主唱者の名前から Roesler 説<sup>①</sup>と呼ばれる事もある。ラウジツ文化の発祥の地がロシア領内かドイツ圏内か、そ

れぞれロシア人の歴史家とドイツ人の学者が論争し、自国での発生説を擁護した如く、この種の問題にはナショナリズムの感情論が学問的中立をはるかに凌駕している場合が残念ながら見受けられる。筆者はその様なナショナリズムの偏見とは一切係りが無いから公正な立場で、このバルカン・ロマンス語の発祥の地を突止めてみたい。

今「バルカン・ロマンス語」と言ったが、例えばフランス語で言えば *langues romanes balkaniques*, つまり複数のロマンス語がバルカン半島にあるという事になる。それらには当然、今日では死滅したダルマチア語、ユダヤ人の用いるスペイン語、ルーマニアのロマンス語及びその三つの「方言」が含まれるはずであるが、拙論では、ダルマチア語とユダヤ・スペイン語については、問題の性質上触れない。そして今、ルーマニア語には三つの「方言」があると言い、あたかもルーマニアのロマンス語が標準語であるかの如き言い方をしたが、これはあくまでも現代語での分類であり、一般に行われている方法である事は周知の通りである。歴史的に見た場合、三つの言語はそれぞれの存在を十分に主張できるのである。その様な意味から筆者は英語の要約で *Romanian languages* と複数で記したのである。そして、拙論では、四つの異なる名称を有す言語として論を進めて行く事にするが、その前にそれらの四つの言語とは何々であり今日どの様な分布を成しているかを見なければならない。

1) ルーマニア語で *dacoromâna* と呼ばれる言語は、現在のルーマニア、ベッサラビア、ソ連のプロヴィナの一部、ユーゴスラビアのバナト、ブルガリアとハンガリアでルーマニアの国境に隣接した地域で行われている。トランシルバニアの中程にはマギヤールを話す集団が弧島を成している。「ルーマニア (România)」という国名がローマ (Roma) という名称を一番忠実に保っていると言う人が多いが、それは事実であるとしても、極めて危険に満ちた表現であると言える。と言うのは、中世を通じてルーマニアという一つの国名で呼ばれ得る程に国は統一された例は無く、1862年になってやっとルーマニアという国名を採用したのであるから。尤も、その様な国名は、ルーマニア人が自らをローマ人の後裔であると考え、且つ、その事に誇りを感じているから生れたのであり、Iorgu Iordan が“トラヤヌスは我々ルーマニア人の精神的創造者なのです”と1975年3月筆者に語った事からも窺われる如く、ルーマニア人の旧ローマ帝国に対する愛着の度合いはとても強く、決して帝国主義の侵略者などとは考えていないのである。その様な人達の運用言語が *dacoromâna* である。

2) *aromâna* は別名マケドニアのルーマニア語とも呼ばれ、半島の実に広い範囲で運用されている。国名をあげれば、アルバニア、ユーゴスラビア、ギリシャ、ブルガリアの四ヶ国に点在しているし、今日 *aromâna* を話す地点以外でもこの言語による地名がある所からすると、以前は現在よりもっと広がっていたと思われる。この言語は *dacoromâna* に次いで多くの話者を有し、約35万人である。*aromâna* が *dacoromâna* と異なる点は、Pierre Bec 1971 によれば、次の6つである。

- |                |                |             |
|----------------|----------------|-------------|
| a) L' と N' の保存 | : FÎLIU >hil'u | dac. r. fiu |
|                | CŪNĒU >cun'u   | // cui      |
| b) CL と GL の保存 | : CLAVE >cl'ae | // cheie    |

- GLACIA > gl'atsă // gheată
- c) I に後続される N の口蓋化 : BONI > buñ // buni
- d) 複合子音の後では -U は脱落しない : ŌCTU > optu // opt
- SŌMNU > somnu // somn
- e) E は唇子音の後で軟口蓋化しない : PĪLU > per // pār
- f) 語中音の省略は dacoromâna より頻繁である。

これらの6つの項目のうち、a), b), d) から判る通り、aromânaの方が dacoromâna よりも古形を保っていると言える。

3) meglenoromâna というのは dacoromâna での名称で、自分達の事は自らの言語で Vîlaşi と呼ぶ。これは、ゲルマン人がトランシルバニアの遊牧民の事をブラック人と呼んだ事に由来すると思われる。サロニカの北東にある Meglen 州とドロブジャ地方及び少アジアに1万5千人から2万人くらいのわずかの運用者を数えるのみである。aromâna と共通する特徴を多く有す為に、両者の共存の期間が相当長かったと考えられる。meglenoromâna の音韻の特徴は、Pierre Bec 1971 によると次の通りである。

- a) ā と î はアクセントがある時に中和する : LANA > lônă dac. r. lină
- b) E は唇子音の後で保存される : PĪRU > per // pār
- c) L' と N' の保存 : LĒPŌRE > l'epuri // —
- VĪNĒA > vin'ă // vie
- d) č > t, ġ > z : CAELU > ter // cer
- GĒNĒRU > ziniri // ginere
- e) -L の軟口蓋化 : CABALLU > cał // cal

4) istroromâna は、イストリアで約1500人程度の話者しか有しないが、その殆んど全員が二言語併用者である。スラヴ語とイタリア語に同化する運命にあると言える。Maggiore 山と Cepih 湖間の村落に XIII 世紀からの存続の証拠がある。aromâna や meglenoromâna とは異なるが、dacoromâna とは外くの共通する特徴を有す。次に dacoromâna とは異なる特徴をあげてみよう。

- a) N' と L' の保存 : CŪNĒU > cuñ dac. r. cui
- FĪNIU > fil' // fiu
- b) U > v : \*CAUĪTO > còvtu // caut
- c) 内破音及び語末の L の消失 : \*CALDU > còd // cald
- d) K > t, ġ > z : QUARĒRE > tere // cere
- GENŪCLU > zeruncl'u // —

音韻面に限って言えば、以上の如くであるから、istroromâna と dacoromâna は、aromâna と meglenoromâna とがそうである如く、極めて近い関係にあり、両者の長い間の接触がもたらしたものであると考えられる。

II 今述べた様に、これら四つの言語は二つづつが極めて類似していて、その分岐過程が相当明らかであるから、実質的には二つの言語圏の発祥地を考察すれば良い事に成る。二つの言語圏というのは、dacoromâna 圏と aromâna 圏の事である。この様に地理的に離れた同類の言語が存在する例として思い出されるのは、イベリア半島のカタロニア語とポルトガル語の関係である。両者の間に丁度クサビの様に突き出ているのがカスティリア語であり、そのカスティリア語によって中断されているものの、カタロニア語とポルトガル語はお互に類似点が多く、カスティリア語とポルトガル語及びカスティリア語とカタロニア語との類似点よりもはるかに多い為に、ポルトガル語とカタロニア語は元々一つの言語であった事が想定され、イベリア半島はアラビア語の侵入以前の西ゴート王朝時代には言語的に統一されていた、と見るのが今や常識である。このようなイベリア半島の場合と同じく、今我々が扱っているバルカン・ロマンス語の場合も、「ルーマニア祖語 (仏 *protoroumain*, 羅 *străromână*)」を想定できよう。その年代に関して、例えば Al. Rosetti 1973 a は VII 世紀か VIII 世紀に始まり X 世紀に終るとし、Pierre Bec 1971 は、分裂が IX 世紀から XII 世紀の間に行われるという自説にかんがみ、その始まりの時期を V 世紀から VIII 世紀の間においている。拙論では、この様に論争の多い「ルーマニア祖語」の発祥の地と年代についても考察したい。

III まず、ルーマニア語はダニユーフ河以北の地における継続であるという説を紹介しよう。Pierre Bec 1971 は河北における継続説支持者で、移住説に対して次の様な主旨の事を言っている。

- a) もしローマの要素が古モエシアにおいて重大であったのであれば、ダニユーフ河の右側地域の急速なスラヴ化は説明不可能な現象となる。
- b) 蛮族の侵入が続行中であり今尚不安定な状況であるのに、集団となって河北に移住する理由はない。
- c) もしその様な移民が大量に行われたのであれば、何か文献に残っているはずであるが、見当たらない。
- d) ハンガリーとロシアの XII 世紀と XIII 世紀の年代記が、トランシルバニア地方における X 世紀の、モルダビア地方における XII 世紀の公国の存在を証明している。
- e) もしルーマニア人が河南地方から移住したのであれば、キリスト教の用語がスラヴ・ビザンチン的であるはずであるが、実はラテン語である。
- f) 地名がダーキア撤廃後とても古くから存在するという事は、中断が無い事を証明する。もし、アウレリアヌス帝の撤退命令によりダーキアが完全に無人化したのであれば、Motru (AMUTRIA), Mures (MARISIA), Cris (GRISIA), Somes (SAMUS), Timis (TIUISCO), Olt (ALUTUS), Prut (PYRETOS), Cerna (TSIERNA) などの紀元前 V 世紀からローマ人やギリシャ人によって記録されている河川名が今日まで保存され得るはずが無い。町名や村名のラテン語が見当たらないからといって河北におけるローマ人の存続説を否定するものではなく、むしろ蛮族侵入による陰気な時代を喚起するだけであり、その侵入によって家居及び文化の全根跡が全滅してしまったのである。

そして、その発祥の地に関して、発祥地説 (la théorie d'un《berceau》originel) は東ロマニアでは適用できないとし乍も、Pierre Bec はダニューブ地方のラテン語は 次の様な地方で話され続けたとして地名をあげている。

イ) トランシルバニアの片隅。

ロ) カルパチア山脈の南斜面 (オルテニア) と西斜面 (バナット)。

ハ) バルカン連峯の二つの北斜面 (上・下モエシア)。

ハ) の両モエシアを含むとした最後の項目は、従来の継続説からは期待できそうに無いのであるが、最近の移住説に押された結果であろうと思われる。以上が継続説派の大要であると言える。それに反する移住説を Carlo Tagliavini 1973 により紹介しよう。C. Tagliavini は、ルーマニア祖語はダニューブ河の右岸で発展した、と言い切っている。その論拠は次の様な点にある。

a) アルバニア語と諸々の一致が見られるが、それは共通の基層語によるのでは無く、一定期間両言語が共存した事による。

b) ルーマニア語に認められるスラヴ語の要素がブルガリア語的である。(北スラヴ語的要素は当然最近のものである。)

c) 古いゲルマン的要素が存在しない。

以上の三点が、C. Tagliavini をして河北における継続説を否定せしめ、発祥の地をおおむね旧セルビアの地であると言わせしめている理由である。

前述の如く、ルーマニア語とアルバニア語は多くの共通する特徴を有するのであるが、それらがどのようなものであるか、Kr. Sandfeld 1930 によって、語彙関係以外のものを列挙してみよう。

(以下、ルーマニア語を羅語、アルバニア語を阿語、ブルガリア語を勃語と略することがある。dacoromâna の正書法は筆者が現行のものに改めた。) まず音韻面に関しては、

a) アクセントの無い A は羅語で ä, 阿語で ë :

SANITATEM > sănătate shëndët

CAMISIA > cămașă këmishë

b) AN, AM にアクセントがある時、羅語 in, i m, 阿語 ën, ëm :

CANTICUM > cîntec kêngë

CAMPUS > cîmp këmbë

c) Ū は両言語とも保存する :

\*EXCURTUS > scurt shkurtë

LUCTA > luptă luftë

d) 母音間摩擦子音 -B- の消失 :

CABALLUS > cal kal

CUBITUS > cot kut

これらの現象に関して意見は多岐にわたっている事を Sanefeld も述べている。即ち、A > ä はルーマニア語ではかなり規則的であるが、反面、アルバニア語の ë は A 以外からも派生する

し、イタリア語からの借用語でも a は è に成ると言う。

造語法に関する共通点は、

- e) 両言語とも、男性名詞から女性名詞を作る際に -onia を使う：

羅語 urs 牡熊 ursoaie 牝熊    阿語 ujk 牡狼 ujkonjë 牝熊

- f) スペイン語の cualquiera やイタリア語の qualsivoglia とほぼ同じく、不定代名詞を形成する際、両言語とも「欲する」という意味の動詞・直説法現在三人称単数を用いる。

西語 quienquiera    羅語 cineva    阿語 kushdó

” dondequiera    ” undeva    ” kudó

aromâna にも cândva (ママ) (whenever) と citva (whichever) を除き, cineva, ceva, undeva は存在する。

- g) 「決して...ぬ」西語 nunca, 仏語 jamais は羅語では niciodată と言うが、阿語も同じ造語法に寄る。即ち, as një herë。

- h) 「いつもそうだ」(仏語 tout ainsi) は、羅語 tot așa 阿語 gjith ashtú で同じ構造である。

- i) 様態を表す羅語の接尾辞の -ește は阿語では -ishte である。

「羊飼いの様に」    羅語 ciobănește    阿語 tshobanisht

「トルコ風に」    ” turcește    ” turqisht

- j) 「最初の・第一の」という時の序数に関しても両言語は同じ構造を有すが、「二番目の」以降も同じ構造である。

「二番目の」    羅語 m. al doilea f. a doua    阿語 m. i dytë f. e dytë

「三番目の」    羅語 m. al treilea f. a treia    阿語 m. i tretë f. e tretë

これと同じ構造はブルガリア語も有している。

- k) 数詞の「百」には両言語とも不定冠詞を前置する。

羅語 o sută    阿語 një qind

統辞面でも両言語は多くの共通点を有すが、それは極めて特筆に価する事である。

- l) ルーマニア語では過去分詞が名詞的役割を果すが、アルバニア語の場合も同じである。

仏語 Qu' y a-t-il à faire?    羅語 Ce-i de făcut?

” J'ai beaucoup à faire    ” Am multe de făcut.

” Il est à lier    阿語 Ishtë për të lidhurë.

” J'ai à lier    ” Kam për të lidhurë.

前置詞の për (阿語) と de (羅語) は同じ働きをしている。

- m) 殆んどのロマンス語と異り、不定詞に前置詞を冠す。

羅語 a dormi    阿語 me fjet    (cf. 西語 dormir)

- n) 「必要である」の構文が両言語とも同じである。

羅語 Trebuie făcut.    阿語 Duhet bë

cf. 仏語 Cela doit se faire.

o) 複合時制を作る際、ロマンス語の中には仏語の être や venir に価する動詞を用いる言語もあるが、両言語とも avoir に価する動詞を用いる。

羅語 Am venit 阿語 Kam sósurë cf. 仏語 Je suis venu.

この複合時制に関しては、meglenoromâna と aromâna の一部では être に価する動詞が用いられるが、それはブルガリア語と共通する現象である。

p) 両言語は共に、代名詞の女性形を中性的意味で用いる。

羅語 O ştiu=仏語 Je la sais, Je sais cela.

阿語 I tha këtë=仏語 Il lui a dit cela.

同じく形容詞の女性複数形も中性的意味で用いられる。

羅語 cele bune şi cele rele=仏語 le ben et le mauvais

阿語 të mira edhé të liga.

q) 両言語とも定冠詞を後置するし、その用法もいちぢるしい一致を示している。両言語とも特定のきまり文句の時を除いて、前置詞に支配された場合は定冠調は用いない。

羅語 Am găsit-o pe drum=仏語 Je l'ai trouvé sur la route.

阿語 Vate në pallát=仏語 Il est allé au palais.

又、両言語とも所有冠詞という形態を有す。

羅語 un frate al meu 阿語 një vellanë t im (私の弟を)

同じ所有冠詞は属格の前で限定詞となる。

羅語 limba animalelor şi a paserilor

阿語 gluhët e kafshëvet edhé të zogjet

仏語 la langue des animaux et des oiseaux

r) 名詞の屈折に関して、ルーマニア語の中性は単数では男性と同じ変化をし、複数では女性と同じ変化をするが、これはアルバニア語やイタリア語にも見られる現象である。<sup>②</sup>

s) ルーマニア語とアルバニア語と南イタリアの方言とが類似する場合も上述の如く多い。

「理解する」とか「見る」という動詞と共に「その様に (仏語 ainsi)」という副詞が、「それを (仏語 cela)」の代りに用いられるのがその一つの例である。

羅語 aşă, astfel 阿語 ashtú 南伊太利方言 akussi

ギリシャ語でも έτσι が同じ意味に成る。

V aromâna の方が dacoromâna よりも古形を保っているという事は、前述の如く、一致した意見であるが、その aromâna とアルバニア語との類似点を Sandfeld 1930 によって列挙してみよう。(aromâna については、筆者は最近の正書法を知らないので、Sandfeld の綴字法をそのまま利用する。)

a) rn 及び rl が rr という風に同化する。つまり、長い r がスペイン語の様に強く連打される様に発音される。

aromâna ficiorru<ficiorlu 仏語 le fils



iarră<iarnă // hiver

b) l が ll の如く発音される。

c) 複合時制は avoir に価する動詞と過去分詞で作るが、その過去分詞は aromâna では女性形にする。これは、アルバニア語のトスク方言で -ë の形を使う類推とも考えられる。dacoromâna の諸方言にも女性形は時に認められる。

d) アルバニア語の不定代名詞の形態については既に IV の f) で述べたが、aromâna とも対応を示している。

arom.	caretido	itido	iutido	cândtido
阿語	kushdó	tshëdó	kudó	kurdó
英語	whoever	whichever	wherever	whenever

-do は「欲する」という意味の三人称単数である。

e) 時を表す接続詞 când (英語 when) と共に、両言語とも接続法をしばしば用いる。

f) 比例の表現の時も、共に接続法を用いる。

arom. Fă cum s-vrei=仏語 Fais comme tu voudras.

阿語 Bën tsh të ditsh=仏語 Fais ce que tu sauras.

dacoromâna では Fă cum vrei と言うが、スペイン語では Haz como quieras と言うのが普通であり、この場合は aromâna と似ている。

g) dacoromâna の場合、過去時制と係りがある時でも接続法現在形が用いられるが、aromâna とアルバニア語においては接続法完了過去形が用いられる。

h) aromâna で omlu a calilei は公正な人間という意味であるが、cale「道」と属格をこのような表現で使うのは、アルバニア語と同じである。

i) where という疑問副詞は aromâna では iu のはずであるが from に価する前置詞を冠して from where=where の如く di iu と言う。これは、アルバニア語で ngaha と言うのと同じである。スペイン語でも dónde は、語源的には、現代語に逐語訳すると、de dónde である。

j) aromâna では、la はフランス語の chez という前置詞に価し、前置詞格の代名詞が来るはずであるが、主格が来て vas-yinã la io. (=仏語 Il va venir chez moi.) と言うが、この主格の用法もアルバニア語と同じである。

k) aromâna の数詞 trei (3)に女性形があるのは、tre に対し tri という女性形を有すアルバニア語の影響に寄る。

VI 次にブルガリア語とルーマニア語との類似点を Sandfeld 1930 によって列挙しよう。

a) ルーマニア語で e- が [ie] と発音されるのはブルガリア語の影響である。dacoromâna では、例えば el は [iel], este は [ieste] である。aromâna にはこの様な二重母音化は無いが、meglenoromâna には認められる。

b) ラテン語の -SC- が E と I の前にある時、ルーマニア語では [št] と成る。例如 : știu< SCIO. これは、ブルガリア語の sktj という扱いに似ている。

c) ルーマニア語には他のロマンス諸語と異り、呼格がある。男性単数は -e であり、女性単数は -o となる。特にこの -o で終る女性単数はブルガリア語と一致する。

d) 数詞の11-19は、例えば11=unsprezece (=仏語の直訳 un sur dix), 12=doisprezece (=deux sur dix) と言うが、これはスラヴ語と一致を見る点である。aromâna では20を yingit< VIGINTI と言い、dacoromâna の două zeci とは異なるが、21-29では dacoromâna と同じく、un-spră-yingit と言う。これもブルガリア語と一致している。

e) 数詞の造語法のみならず、そのシンタックスもブルガリア語とルーマニア語と一致した現象が見られる。即ち、dacoromâna では20以降、aromâna では11以降、支配される名詞との間に DE (=英語 of) という前置詞を挿入する。

例如：dacoromâna două zeci de iuși 20人

aromâna unsprădzaț di insi 11人

これは、古ブルガリア語で属格が用いらていたなごりと考えられる。

f) 前未来は être に価する動詞 fi の未来形と動詞の過去分詞とで作るのがルーマニア語である。

例如：Voiu(ママ) fi cîntat=I will have sung.

Voiu(ママ) fi scris=I will have written.

ラテン語でも HORTATUS ERO とは言うが、このシンタックスはブルガリア語の Stă bādă pîsal (=I will have written.) と同じであり、ルーマニア語の条件法過去と接続法完了形に fi (=être) を使うのも、ブルガリア語との一致点である。

g) 自動詞の完了形は、aromâna と meglenoromâna では dacoromâna の avea (=仏語 avoir) と異り fi (=仏語 être) の現在の助けを借りて、例えば、I have come. と言う時、

dacoromâna Am venit.

aromâna Escu venit.

meglenoromâna Sam vinit. と言い、ブルガリア語で Az sām došāl と言うのとは一致を見る。

h) dacoromâna の現代語では、I have eaten は Am mincat という語順をとるが、中世では Mincat-am であった。この語順は現在でも istroromâna や meglenoromâna では普通であり、セルボ・クロアチア語やブルガリア語では規範的である。

i) 再帰動詞に寄って受身の意味を表す方法はロマンス諸語にも見出しされるが、ルーマニア語に最もこの用法が広まっている。これは、スラヴ語の影響に寄るものと思われるし、ルーマニア語の再帰動詞の用法もスラヴ語のそれと一致している。

j) ルーマニア語の仮定条件文では、主文にも従属文にも条件法が使える。これは、他のロマンス諸語には見かけない用法であるが、スラヴ語では一般である。

この外に筆者がブルガリア語を知らない為に、Sandfeld がルーマニア語とスラヴ語（特にブルガリア語）と一致した現象だとしてあげている多くの条項と、dacoromâna とは一致を見せないが aromâna や meglenoromâna とのみ一致を見るブルガリア語の多くの例も割愛した。

VII 今度は、アルバニア語とブルガリア語のどちらかとルーマニア語の現象が一致している例で無く、バルカン半島の諸言語とルーマニア語とに共通した現象について、Sandfeld 1930 よに  
って、列挙してみよう。

a) 定冠詞の後置は、アルバニア語とブルガリア語とルーマニア語に共通した現象である。尤も、地理的に遠く離れているスカンデナヴィアの諸言語にも定冠詞の後置は見られるし、又、ラテン語自体、ロマンス語の定冠詞の元となる指示形容詞の後置は、前置と同様、普通であったけれども、西ロマンス諸語の定冠詞が前置形であり、ロマンス諸語の中でバルカン半島のルーマニア語だけが後置形を用いるのは、やはり隣接するアルバニア語の影響無しには考えられない。それに、ルーマニア語の定冠詞の用法がアルバニア語のそれと似ている事も考慮しなければならない。XI世紀の教会スラヴ語のテキストにはまだ定冠詞が固定していなく、XVII世紀を待たねばならない事から、ブルガリア語の定冠詞については、ルーマニア語あたりの影響を考えねばならない。

b) 次に、バルカンの三つの言語に多少の差はあれ共通しているのは、不定詞（の用法）の消滅又は削減である。半島の三つの言語の中で一番不定詞を良く使うのは dacoromâna であるが、それでもスペイン語などは比較にならず、殆んどの場合、接続法に取って代られている。meglenoromâna も同じく不定詞の頻度は低いが、istoromâna では西ロマンス語と同じ程度に保存されている。これは、地理的に近いイタリア語やセルボクロアチア語の影響である。

c) 前にも言及したが、未来形の作り方が、to want に価する動詞を使う点、ギリシャ語、南アルバニア語、ブルガリア語、セルボ・クロアチア語の四つの言語とルーマニア語は類似している。尤も、フランス語の多くの方言でもこの「欲する」という意味の動詞を使うし、スカンデナヴィア諸語も同じ作り方である点は、冠詞の後置と同じであるが、この両半島には一切影響関係は考えられないものの、バルカン半島の「言語的統一」を否定するわけにはいかない。Al. Rosetti 1973 b によれば、これはギリシャ語の影響で、その影響の強い Calabria や Terra d'ottranto などの南イタリアの方言にも見られる現象であると言うが、バルカンの半島における「統一」は事実である。

d) 筆者が「格の融合」<sup>9)</sup>と呼ぶ現象がバルカンの諸言語に見られる。ルーマニア語には、主格と対格の融合した base form と属格と与格とが融合した case form の二元対立が認められるのであるが、この二元対立法はラテン語の内部構造から生成する可能性が大であったと同時に、隣接するブルガリア語などの影響は否定できない。

e) シンタックスの面でも、半島の諸言語は多くの類似点を見せるが、今は一つの例だけをあげると、「私は空腹だ」と言う時、

英語 I am hungry.

仏語 J'ai faim.

西語 Tengo hambre.

でフランス語とスペイン語は同じ構造を示しているが、dacoromâna では、Mi e foame (仏語の逐語的訳：Il y a faim pour moi.) と言う。この構造は、Gladen sâm というブルガリア語

と似ている。

以上、バルカン半島の言語的統一という事に関して五項目の類似点をあげて来たが、実は、Sandfeld 1930 は十三の項目について述べているのであるが、紙幅の都合で筆者はそのうち八項目を転記するのを省略した。しかし、これらの五項目で、互の類似点の多い事を証明するに十分だと考える。

**VIII** 筆者が今まで Sandfeld 1930 を援用したのは、「バルカン半島の言語的統一」がどの程度まで成されているかを見る為であった。今度は、IIIで紹介した継続説に属する意見を検討してみよう。Al. Rosetti 1941 は「ルーマニア祖語」について大略次の様に言っている。

「dacoromân, istro-român, aromân, meglenoromân は、上・下モエシア、ダーキア及び下パノニアのローマ化されたダニューブ諸州で継続して話されていて、かつては一つの言語であった。その基となる言語の事を、straromân, român primitiv 又は român comun と呼ぶ。megleno-român はブルガリア語の強い影響を受けた aromân の一分派であり、istroromân は dacoromân の一分派である。これら四つの方言の語彙を調べてみると、共通する文化の特徴は田園的で農牧的であった。「共通ルーマニア語」の生成の時期は V・VI世紀に始まり X世紀頃終る。と言うのは、aromân を話す人がギリシャの北に姿を現す記録が980年にあるからである。」

Al. Rosetti は 1973 b になると次の様に述べている。

「ルーマニア語、ブルガリア語、アルバニア語、ギリシャ語などは同一の基層語の為に、あるいは、お互に及ぼした相互影響の結果、多くの共通する特徴を有している。住民の移住・羊飼いの移動も多くの共通特徴を作り出した。ルーマニア人の半島横断は、アルバニア、トラキア、テッサリアなどで XIII世紀頃の記録がある。半島の言語的統一は文化的統一に寄るところが多いが、その文化もラテン的文化区域とギリシャ的文化地域に分けられるが、多くの住民は二つの言語を併用するのが常であった。そして、アルバニア人は現在の様に海岸にではなく、Shkoder, Prizren, Ochrida, Vlora にかこまれる地域にも居住していた。セルビアにもルーマニア人の住んでいた跡が Romanja とか Stari Vlast などという地名に見られる。aromân は dacoromân に比べて古形を保っている。<sup>④</sup> VII世紀からIX世紀にかけて、スラヴ語の要素がルーマニア語に入ってくる。ダニューブ地方の教会はブルガリア教会の教権の下に再編成せられるが、今までの二言語併用は、ラテン文化の継承者であるルーマニア語の優位に終る。南スラヴ語の統一はIX世紀かX世紀頃まで保たれるが、東西のグループに別れ、東はブルガリア語とマケドニア語を含み、西はセルボ・クロアチア語とスロヴェニア語とを含み、ルーマニア語に入ったスラヴ語の多くは東北部のブルガリア語であり、ブルガリア語はそのモデルをギリシャ語の祈禱書に借りている。」

Al. Rosetti 1973 b によると、アルバニアの中心は現在のアルバニアの北にある Mati であったと言う。

**IX** さて、我々はここで出来る限り史実を探り出さねばならない。

アウレリアヌス帝による271年の軍団の撤去により 政府の役人・軍人など主だった住民はダーキアの地を放棄し、ダニューブ河の南側に新たに河岸ダーキア (DACIA RIPENSIS) を、又、その南に内陸ダーキア (DACIA MEDITERRANEA) ——その主都は Serdica. 今日のソフィ

ア——を設置し、ドナウ河以北の蛮族に対する重要な経営の地として、ダーキアから撤収した住民を住まわせた事を我々は知っている。今、新たに州を造ったかの様な言い方をしたが、実はダニューブ河以南のトラキアの地は紀元以前からすでにローマ化されていて、現在のブルガリアの北部にローマ（化された）人が住むのは決してはじめてでは無く、すでになかなりの程度のローマ化が成されていたと見なければならぬ。271年以降に新設された二つのダーキア州は、だから実の所、名目上は新設ではあっても、実質的にはローマ化の継続であり強化であったはずである。ダニューブ河以北にもローマ人居住の考古学的遺物が発見されると以北継続説主張者は言うが、それはローマ人が居住していた150年間のものでないという証拠は無く、ビザンチンの歴史家 Theophylaktos Simokattes が、VII世紀の現在のヴァラキアに価する地が Sclavinia と呼ばれると言っている様に、スラヴ人の地と化した様な所に、上・中流階級のローマ人が去ってしまった力で新たにローマの華が咲くはずが無く、又その様な荒廃した環境でラテン語が河南地域と同程度に生き残るはずは無いと筆者は考えるのである。そして、トラヤヌス帝が植民を開始したダーキアが今日のルーマニアの国と同じ広がりを持っていたと感違いする人が多いが、DACIA FELIX は決して大きな面積を有していたのでは無く、そこに居住した人達も帝国のあらゆる地方から (EX TOTO ORBE ROMANO) 来て植民した新興の都邑だったのである。そこでは、南ガルリアにおける如く言語的規範は守るに難く、ましてや蛮族の侵入によってその様な規範に欠ける言語を保持する事などとうてい出来なかったと思わねばならない。

Stefan Pascu 1974 によれば、発掘された碑文のうち約3000がラテン語で、35～37がギリシャ語で書かれていると言ひ、継続説を支持している様であるが、Gotalania もしくは Sclavinia と化した地帯での教養語と言へばラテン語しか無いのであり、ましてキリル文字の発明はX世紀であった事を忘れてはならない。日常の言語はスラヴ語でも、書記に際しては自らの文字のあるラテン語を使った、と解釈できるのである。

次に、キリスト教はいろいろな意味で重大である。バルカン半島のキリスト教化は早くから行われていたが、1054年に起ったカトリックとオーソドックスの分裂は、それ以前のローマ文化圏とビザンチン文化圏の区分に大いに寄るところが多い。ローマ文化圏とは、ダルマチア州、上・下モエシア州、トラヤヌスに征服されたダーキア州 (DACIA TRAIANA) 及びパンノニア州南部である。ギリシャ文化圏は一応、Skopie の南、ソフィアの西、Hémus 山脈、黒海の沿岸にまで広がっている。しかし、このギリシャ文化圏は、その範囲を越える事がしばしばであった。その様な時、VI世紀・VII世紀にはバルカン半島は完全にスラヴ族の手中に入ってしまう、ビザンチンの支配はわずかダルマチア海岸に限られる程になった。そして、ローマの伝統が昔から相当根強く張っていたギリシャの北とダニューブ河の南の間に位置する、例えば、ダルダニア州でさえ、スラヴ族とローマ人との混住がやっとな行われ、二言語併用という現象が生じたのであるが、ローマの伝統の薄れる傾向にあった旧 DACIA TRAIANA では、二言語併用というよりもスラヴ語色の強い言語生活が行われていたと思われる。ブルガリア人が半島に到来するのは679年である。それからやっとな外国語であるスラヴ語を習い覚え、セルディカ（今日のソフィア）を征服するのは809年の事である。ソフィアを中心とするダルダニア州あたりでは、ローマ

の文化的伝統が継続されラテン語も当然維持されていたと考えられるのであるが、その様な地域でさえも二言語併用という結果になったのである。しかし、ソフィアの西の方、セルビアと隣接するモラヴァ州では、ラテン語はブルガリア語に影響されることなく運用されていた。そこまではビザンチンの力も伸びず、新興のブルガリアの権勢も及ばず、むしろ、ローマ的西方世界に属していたわけである。その様な地域から、農牧的生活を営み、ラテン語を話していたローマ（化）人が北に南に移住したのではあるまいか。Al. Rosetti 1973 b によれば、aromâna を話す住民の根拠が976年に Prespa 湖と Castoria の間に見られると言う。Al. Rosetti 1973 a によれば、aromâna の運用者がマケドニアやギリシャに姿を現すのはXI世紀だと言う。Al. Rosetti 1941 が aromâna を話す民がギリシャの北に姿を現すのは980年であると言っている事は既に述べた。又、Pierre Bec 1971 によれば、istroromâna の話者がトリエステに文献上姿を現すのはXIII世紀であると言う。

この様に、牧畜を業とする「ルーマニア祖語人」は北に南に移動し、隣接するアルバニア語やブルガリア語の直接の影響を受けたものと思われる。dacoromâna が aromâna に比して幾分進化した形態をそなえているのは、牧畜を業とする人達がローマの文化的・言語的伝統のすでに薄れていたダニューブ河以北の地に渡って定住する様になったからで、指導的規範の無い所では一般に言語の古形・正則は保たれ無いからである。それに、istroromâna と dacoromâna は他の二つの言語に比して多くの類似点を有しているという事は既に述べたが、この事は、dacoromâna と istroromâna の運用者が早い時点で祖語から独立した事を意味するのであり、前述の如き多くの文法事項にまでわたるアルバニア語とブルガリア語との対応・類似が河北で起ったものとはどうも考えられない。aromâna と meglenoromâna とがお互に類似した事項を多く有し、dacoromâna と istroromâna と比べて古形を保っているという事も前に述べたが、それは、ローマの文化・言語を異文化の中にあって守り通すだけの規範的伝統があった地域で運用された言語だったからである。その様な伝統は河南では強く、Miron Constantinescu 1970 が言っている如く、ドブロヂャ地方が587年にアヴァール人に蹂躪されるまで、その様な強い伝統が河南では保持されたものと考えられる。その様な伝統が河北とは異り6・700年間も続いた河南で容易に蕩散するとは考えられないのである。

さて、Pierre Bec 1971 が DACIA TRAIANA における継続説の支持者であるとIIIで述べたが、その根拠となっている点をここで検討してみよう。

a) の「急速なスラヴ化」は、イベリア半島の場合を考えれば極めて容易に理解できる。ゴート族に支配され次にアラビア人の侵入を受け乍らもラテン語が残りが得たのは、ラテン文化の強さと支配階級のゴート人の人数の少なさにあったのであり、反面、バルカン半島の場合、殆んど民族移動の通過地であり、度重なる荒廃にも乍らず生き続けたのは、元々はスラヴ族で無いブルガリア人さえもスラヴ語を採用せざるを得なく成った程にスラヴ語運用者の数も力も大きかった為に、二ないし三言語併用という形態で新しい形のラテン語が存続していたのである。

b) の移住の理由については、同一言語を用いる者が一つの集団を形成するという事は、いかなる地域においても又、いつの世であれ、人間の習性であるから、ましてや、牧畜を業とするルー

マニア祖語人が集団となり四方に移住した事は理解に難く無い。ダニユーブ河は、決して自然の国境を形成するに足る険しい流れでは無く、むしろ、ロシア平原を南北に流れる多くの河川の場合と同じく、今や大陸にあって交通を容易にせしめ、移動を促進する運河の役目を果していたのである。トランシルバニア山脈は、上質の水と必需品の塩を産す豊かな牧草地であった。

c)とd) の、文献が残存していないからと言って、そういう事実が無かったとは限らないのである。むしろ、牧畜業を営む人達の移動は、自然な出来事であって、それを記す程の特異性は全く無いし、ルーマニア語の文献の初出はXVI世紀であるが、それ以前に歴史が何も無かったのではないのと同じ事である。Miron Constantinescu 1970 が、XII世紀にトランシルバニアにルーマニア（語を話す）人の定住の跡があるというのは、我々の言う移民ルーマニア人の跡で無いという証拠は無いのである。

e) のキリスト教用語の問題について、前項で少し横道にそれてしまったが、前述の如く、我々がルーマニア祖語の発祥地としている地域はビザンチン文化圏にあるのでは無く、むしろ、ラテン文化圏にあり、そこに居住する信者に平易に分るラテン語を使うのは当然である。それに、キリスト教化の年代とルーマニア祖語の分裂もしくはトランシルバニアへの移住の時期とに関係があるが、スラヴ族のキリスト教化はIX世紀かX世紀の事であり、北の dacoromâna にしろ南の aromâna にしろ、民衆がすでに新しい形のラテン語を母語としていた時期に、何もギリシャ語をキリスト教用語にする必要は全く無かったわけで、否、むしろ、有害ですらあったはずだ。一般大衆に平易に判る言葉でなければ宗教は支持を得られるはずも無く、ギリシャ正教だからといってギリシャ語のみを強要するのであれば、ブルガリア語的色彩の強いスラヴ語でのキュロスとメトディオスの布教が認められるはずが無く、ギリシャ語の代りにスラヴ語を使う自主的なブルガリア教会が生れる素地も無かったわけである。そして、1054年のローマ教会とギリシャ教会の分裂は、すでに民衆の母語が確立した後であるから、「キリスト教用語」の問題は、いささかも問題にならない。

C. Tagliavini 1973 によると、ブルガリア教会が独立するのは891年のことで、ルーマニア教会は1020年に、そのブルガリア教会に従属している。そして、この時代の文献で今日残存するものが殆んどブルガリア語で書かれているのを見ても、当時いかにブルガリア語の影響が強かったかが判る。

f) の地名の問題であるが、IIのf)に列記した河川名がIII世紀から継続して今日に至っているという証拠はどこにも無いのである。だから、それらは、ラテン語を話す民衆の移民後のラテン名であっても決しておかしく無く、むしろ反対に、București という主都の名前がアルバニア語の要素を含んでいる事や、筆者が今まであげて来たバルカン半島の言語的統一は、継続説では説明出来ないのでは無からうか。

X IIIにおいて C. Tagliavini の移住説を紹介したが、その中のa)で、アルバニア語との一致は一定期間の共存の結果であるとしているが、筆者は、正確には、二言語、あるいは、ブルガリア語も入れて、三言語併用の結果であり、必ずしも共存の結果とは考えない。それは、牧畜を業と

する人達の非家居的生活からの類推である。その場合、各人が三言語併用能力を有す必要は必ずしも無く、つまり、parole 的段階での三言語運用能力が必要なのでは無く、社会集団的に能力があった、つまり、文法を決定する langue の段階で三言語併用という現象があり、それが祖語と成ったものと考えられるのである。そして、その祖語生成の年代は、Pierre Bec や Al. Rosetti の言う如き、V・VI世紀の早い時期ではあり得ない。なぜならば、アルバニア人は現在のアルバニアよりも東北の地に早くから居住して当地のラテン語と相互影響が出来得る地理的条件下にあったとしても、ブルガリア人が河岸ダーキア及び内陸ダーキア並びにダルダニアに近いソフィアを征服するのは、前述の如く809年の事であり、それ以降でなければルーマニア語と成るラテン語におけるブルガリア語の影響は年代的にも地理的にも不可能なのである。その様なわけで、ルーマニア祖語がアルバニア語やブルガリア語の影響を同時に受ける年代は、IX世紀の始めから約七世代後のX世紀末という事になる。そして、その生活様式は農牧的であった事は既に述べたが、Grigore Nandriș 1952 が、「基本語彙を調べて見ると、カルパチア・バルカン地方におけるローマ文化の崩壊後のラテン語民族は、山岳地方における牧畜的生活に限られ...“移動する”という意味の単語がルーマニア語には特に多い。」と述べている事から判る如く、“移動”を開始し、aromâna の運用者は早くから文化的にも言語的にも孤立した状態に陥ったけれども、長いローマの伝統のある地域で生きのびていたがゆえに、dacoromâna よりも古い形を保っているものと考えられるのである。それに反し、dacoromâna が幾分進化した形態を呈するのは、孤立した状態で指導的規範に沿う事が出来なかった為である。

「ルーマニア」という国の名前は1862年になって新たに付けられたものであって、それ以前は封建時代以来複数の侯国などに分割されていたという事は周知の事であり、ダーキアとルーマニアの間には、名称から想像される様な直接の関係は無い。しかし、セルビアの Bosna 河の上流域に、Romanija というまぎれもなく Roma, Romania から派生した地名が、Al. Rosetti 1973 も言う様に中世を通じて存続していたという事は、西ローマ帝国崩壊以後のバルカン半島における文化的中心の一つがそこにあったという事を考えせしめる。そして、そこは地理的に見て、アルバニア人と隣接する西北限であったと考えなければならない。又、今まで我々が使ってきた aromâna という名称も、より古い伝統を示すものである事は自明である。東端は、河岸ダーキア、内陸ダーキア、ダルダニア州の東端となる Isker 河であり、南限は、ソフィアからスコピエに至るラテン文化圏とビザンチン文化圏の境界線と一致し、スコピエと Romanija を結ぶ線が、アルバニア語圏との併存が最も濃厚に実現した地帯ではなかろうか。

ルーマニア祖語は、この様な地域に三言語併用の結果生れたものであり、Al. Rosetti が一貫して唱えているトラキア語の基層説は、トラキア語がローマ文化・ギリシャ文化などのより優れた文化を凌いで生き残れるはずが無く、又、前に記したあれ程多くの共通した特徴をバルカンの三つの異なる言語に同時に遺影を残すことなど出来るはずが無いので、全面的には認めるわけにはゆかない。そして、トランシルバニアにおける継続説それ自体に種々の変異があるのであるが、筆者は継続を全く認めないのではないが、少なくとも「ルーマニア祖語」の年代と地域に関する限り、しかも、特にその言語・文化的規範の中心を成す限定された範囲を云々する時、ダニューブ



河以北のトランシルバニアは除外せざるを得なく成る。

「ルーマニア祖語」という筆者の術語は、この様に言って来た場合、アルバニア語とブルガリア語の影響を同時に受けたと考えられるIX世紀とX世紀において河南地帯で行われた新しい形のラテン語を意味するのであり、それ以前もラテン語は同じ地域で行われていたわけであるが、その様なラテン語は *pre-common Romanian* と呼べるであろう。

〔注〕

- ① Roesler, *Rumänische Studien*, 1871.
- ② これについては、拙論：「ルーマニア語名詞の格融合と性転換について」ロマンス語研究10号を見られたい。
- ③ 同上
- ④ 例えば、*dacoromâna* では対格に *pe* を用いるが、*aromâna* では用いない。スペイン語などと同様、後世の発明である。

**BIBLIOGRAPHY**

- Pierre Bec 1971, *Manuel Pratique de Philologie Romane*, Paris.
- Miron Constantinescu 1970, avec Constantin Daicoviciu et Ștefan Pascu, *Histoire de la Roumanie des origines à nos jours*, Edition Harvath.
- Grigore Nandriș 1952, The development and structure of Rumanian, *The Slavonic Review* No. 30.
- Ștefan Pascu 1974, *Istoria României*, București.
- Al. Rosetti 1941, *Istoria limbii române*, vol. IV, București.
- Al. Rosetti 1973 a, *Brève histoire de la langue roumaine des origines à nos jours*, Paris.
- Al. Rosetti 1973 b, *Études linguistiques*, Paris.
- Kr. Sandfeld 1930, *Linguistique Balkanique*, Paris.
- Carlo Tagliavini 1973, *Orígenes de las lenguas neo-latinas*, México.